

森堯茂インタビュー：洲之内徹との関係を中心に

鳴原 悠

インタビュアー：町立久万美術館長 高木 貞重、
町立久万美術館学芸員 神内 有理、
愛媛県美術館学芸員 鳴原 悠

日時、場所：2013年4月16日午後、松山市内の喫茶店
にて

書き起こし・註：鳴原 悠

—このインタビューでは、洲之内徹との関係を中心に、
当時のことなどをお聞きしたいと思います。よろしく
お願いします。

森 芸術新潮の…気まぐれ美術館でしたよね。

鳴原 そうですね、一般の方にも名前が良く（知られ
るようになった）。

森 芥川賞の、（候補になった時）丁度洲之内さんに
会った時だからねえ。（註：横光利一賞か。付記参照）僕
も、同じ県の人だし、松山にいる間に会っておきた
いとおもって、それで、松山に出てきて、洲之内さ
んと会って、東京へ行こうと思っているんだと言っ
たら、俺もいくから、向こうで会いましょうと。

鳴原 洲之内さんは（愛媛県立）松山東高等学校の校
歌の作詞もしているんですよね。

森 東高の校歌、ああ、そう言っていたねえ。うん。
で、東高行って洲之内さん、歌ってもらったらしい
ねえ。そんなこと書いていたでしょう。（註：洲之内
徹「校歌で思い出すこと」『青柳』90周年号、1969年）

しかし、あれはしかしちょっとわからないな。あ
の人はやっぱりねえ、やっぱり、人生そのものにつ
いても、ある程度文学的に作るからね、作って話す
からね。うまくできているんだけど、それはちょ
っとわからない。

戦前に警察に追っかけられた話も、あの人は何か、
部分作った話だろうけど、面白く話すんでねえ、こ
ちらが身を乗り出すような話方してて、面白かった
んよ。

高木 洲之内さんに会いたくて松山に来たと、そのと
きはもう三島の高等学校はやめられていたんですか。

森 もう、東京に出てくるからって先生をやめて、洲
之内さんに会った。俺も東京へ行くから、また向こ
うで会いましょうってことで。

高木 松山では何度くらい会ったんですか？一度だ
け？二人で、東京へ行こうという約束を？

森 うん、後から行くからって、洲之内さんがそう言
って。

神内 そのときに、初めてお目にかかれたときの洲
之内さんの、出会いの部分をもう少し覚えておられ
るか。

森 出会いの部分？ちょうど洲之内さんが東京へ出る
前、松山にいる時だと思うのよ、それで僕もその頃
東京へ行くつもりで、一度、芥川賞の候補になった
洲之内さんに会ってみたいと、それで松山に出てき
た。僕はその頃は三島にいましたからね。

神内 会われたときの印象は、どのような感じでした
か。

森 僕と9つ違いで、先輩になりますけど、どうして
も、早く会っておかないと。いずれ東京に行ったら
会えるだろうけど、松山で会っておきたいと思って、
（上京の）直前位に会ったんですよ。

『文脈』^①の同人で、長野君、長野広生^②、彼の紹
介で会って、それでまた東京行ったら向こうで会お
うと。4月くらいに2、3か月くらい遅れて洲之内
さんが（上京した）。出てきたらすぐやってきたよ。
俺も出てきたよ、って。

神内 なかなか、今でしたら、上京する人間も多いで
しょうけど…。

森 この時代はよっぽどの、人生の覚悟を決めてじゃ
ないと、行けなかったからね。

洲之内さんは中国にいたでしょう。戦争でいろい
ろややこしいことがいっぱいあって。まあ、僕が会

った最初の印象っていうのは、小さい人だったけども、考えていることのスケールが大きいということだね。大きい人だなという印象がしますねえ。

神内 上京は、人生の覚悟を決めてという、上京には相当の覚悟が必要だったということですけども、私は、洲之内徹が評価した作家と言うのはみなさん、芸術に、まあ殉職したいるような、そういう作家が多いなあという風に思っているんですけども、やはり、洲之内さん自身、出会いのころから、そういったところで出会われたということなんでしょうか。

森 うん、そうかもしれないね。私と9歳違うのかな、9歳違って。それ以上に大人だった。

鳴原 松山での洲之内さんっていうのは、有名な存在と言うか、若い人たちの間ではよく知られている存在だったんですか。

森 うん、ある部分では、左翼運動をやった訳だから。洲之内さんに会ったのは何年くらいだったかね。

神内 27歳で、昭和24年に東京に出て来られていますか。

森 24年。

神内 はい、その前年位に会われたと。

森 そうそう。その前年です。それから僕が行って、ちょっと遅れて洲之内さんが出てきたんだよね。

とにかく、どんなひとなのか、洲之内さんがいる間に会ってみようと思ってね。それで松山に出てきた訳なんだけど。

神内 洲之内さんが語られる、戦後すぐの松山に戻った時の自分と言うのはかなり、戦争の暗さを一身に負っているような、陰鬱な存在として書かれていてような感じが、ご自身で語られていてそんな印象があるんですけども、森先生が会われた印象、その大人びているというのは。

森 とにかく大人だったような気がするね。

愛媛新聞の村上峰保⁹⁾さん。あの人が割と松山時代のことを（良く知っている）。光田稔¹⁰⁾さんと。村上さんも警察に捕まったりしたことがあったんじゃない。あと、名本栄一さんと¹¹⁾か、皆知ってはいるけど。光田さんも。皆亡くなられたけれど。

90歳になるから。短かったような気もするし、長

かったような気もするし。戦争が長い、嫌な思いしたからね。洲之内さんは自分の戦争の体験談はひとつおり気まぐれでかいているでしょう。

神内 芥川候補の小説なども…陰鬱な気分になるといわれますけれども。まあすごく、迫力はありますよね、文章自体に。よく洲之内さんがご自身でいろいろ語っておられるだけに、後々の読者は洲之内さんの文章を読んだらそれが事実だというような感じで、理解をしていったりするんですけど、そこで白の会の同人誌だったり、松山側からも少し、洲之内徹が自ら語ったこと以外の部分っていうのが、もうちょっと知ってもらいたいっていうような気がしますね。

森 洲之内さんがもっていたコレクションは全部宮城にあって、結局久万にあるのは、井部さんがもつたやつですよ。井部さんが持っていなかったら、そのままそこにいっていたかもしれない。

高木 槐多の裸婦は…口止めさせて内緒で持って帰ったと。洲之内さんが上京されてからのおつきあいは、どうだったんですか。現代画廊で会っていた？

森 田村泰次郎がやっていた画廊を手伝ったわけよ、マネージャーとして。で、結局、その画廊がもつたくなって洲之内さんが現代画廊を作った訳ですよ。僕が洲之内さんとおつきあいをしていたのは現代画廊ですね。井部（註：井部栄治）さんに作品を売ったのも洲之内さんだから。洲之内さんのお父さんっていうのは井部さんの先代とかなり、近いところにいたようですね。

神内 井部栄治さんですけども、元々骨董品なんかを松山で集めてておられて、それが洲之内さんのお父さんのお店で、最初そちらの方でおつきあいがあったようで。お父さんが、息子が銀座で画廊をみてくれないかと、オープンしてすぐくらいに行かれたと。そういうところからおつきあいが始まっているようです。森先生も、井部コレクションの中に入っている作品は、5点あったんですけども、井部さんのお宅から、領収書代わりに洲之内さんの名刺に書かれたものが井部さんのところにあるんですけど、その中に森先生のもあったりして、おもしろくみましたけれども。

森 ああなるほど。

神内 その時は洲之内さんが紹介してくださっているんですか。

森 井部さんとは、洲之内さんのお父さんの代からのつながりだった。僕の作品を一番最初に買ったのは、井部さんだからね。どんな人が買ったのか、現代画廊でだれが買ったのかわからなかった、それでどんな人が買ったんですかときいたら、松山からの山の奥の方へ入ったところにある大地主よって。

神内 そのあと、実際に井部さんとお会いになったのは？

森 井部さんとは東京で、僕の作品買ってくれたときに。井部さんはしょっちゅう洲之内さんの現代画廊へ、東京へ出てきたら必ず来てましたからね。そこでお目にかかったはずなんですよ。で、洲之内さんにそこで紹介された訳です。洲之内さんが亡くなったあと井部さんとの付き合いは続いた。洲之内さんがいなくなったらねえ、井部さんとのつながりもなかっただろうね。なつかしいね（笑）

高木 鎌倉近美（註：神奈川県立近代美術館）での展覧会をされてますけど、鎌倉近美にも洲之内さんが紹介したんですか。先生と土方さんの関係がまずあったんですか。

森 鎌倉との関係は、洲之内さんを通してではなかったと思うんだけどね。そのうち、洲之内さんと僕と一緒に鎌倉に行って、それから。その前に洲之内さんと土方定一さんっていうのは、中国で会っていて。

戦争中に、僕を介さないで（洲之内と土方の関係があった）。そこに僕が現れたんで、（一緒に美術館に）行ってみようということになって。

洲之内さんは大人でしたからねえ、最初から大人と子どもの関係だった。年は9つしか違わないけども。洲之内さんは中国で苦労しているでしょう。それで、人生っていうのを心得ていたからね。

神内 戦前のことなんですけれど、洲之内さんが松山で、青年美術家集団というグループを組んでおられたりしていたんですが、そういうことは。

森 ああ、それは話に聴いていたけれど、僕は知らない。

鳴原 直接は関係ないんですか？

森 直接はつながりはないね。光田さんのつながりで村上の峰さんとかね、洲之内さんの年代、岡本鉄四郎とかね。みんな知っていましたが、直接のつながりはなかったですねえ。

神内 されていたことはご存知だったんですか？あとから知られたんですか。

森 ああ、それは、洲之内さんから聞いていたのかな。同時代では知らなかった。

神内 あとから、洲之内さんから聞かれて？

森 洲之内さんっていうのはねえ、ものすごいやっばりおしゃべりだったし、話が上手だったからねえ、つきあっていると色々な自分の話を、貴重な話をきけたよ。幾分の脚色は入っているけれども。

鳴原 戦前のことについて洲之内さんが話されたことで、印象に残っていることとかはありますか。

森 戦前の話？僕とつきあう前の話ですか。それは洲之内さん、おしゃべりなひとだから、いっぱい僕に話して、しょっちゅう日常的に話していましたからね。光田さんとか、村上峰保さんの話とか。

神内 戦前のこととかも含めて、森先生が、洲之内さんが文章で書いておられることと、話聞いたこととちょっと違うなあとか思われたことがありますか。

森 洲之内さんの、日常の話っぷりっていうのがあるんだよね。全て洲之内さんのことを信用するわけにはいかんという感じで、話を面白くするからねえ。聞かせるんですよ。

神内 でしたら、松山のことをいろいろ、外から見たら悪口を書いたりしているようにみえますけども、そのあたりは、森先生はどんなふうにごらんになっていたんでしょう。

森 いや、もっと、この調子でやってほしかった。僕はこう、松山とあまり仲良くしない方が良くと思ってたからね。

神内 青年美術家集団というのが先にあって、そのあと戦後にまた、岡本鉄四郎さんたちと三輪田俊助さんたちが、愛媛現代美術家集団をつくられたりとかしていますけれども、ちょうどこの結成の時に、洲之内さんが、愛媛新聞で応援のメッセージみたいな

文章を発表されていたりするんですけど、自分たちは戦前に青年美術家集団と言うのをつくったけれどもそれはほとんど、当時の県のお偉いさんに対する喧嘩を吹っ掛けただけであまりこう、どちらかというかたにもならなかった、活動は継続しなかったけれども、松山のそういう新しい美術の動きに関して、そういった動きを洲之内さんはどのように見ていらしていたんでしょう。野外展なんかも含めて。

森 洲之内さんは東京にいる訳でしょう、僕はこちらに帰ってくるっていても、あまり洲之内さんは、関わるっていうのは良いとは言わなかったですね。やっぱり洲之内さんの作品を見る見方は、大きいものの見方をする。松山を離れて、中国の方にいたから。

高木 洲之内さんは広い世界から、松山を見てたと。

森 そういことですね。

高木 野外展っていうのは洲之内さんは、関心は示さなかったんですかね？⁶⁾

森 あんまり関わらないほうがいいんじゃないのっていう感じでしたね。

神内 洲之内さんは何か作品について、どんなふうにおっしゃっておられたんですか。新しい作品ができるとお持ちするような形だったんですか。

森 作品についているんなことを洲之内さんは言わないけども、洲之内さんは僕の作品を買ったり、井部さんに紹介したりいろいろしたっていうのはやっぱり、まあ自分の手元にもおきたかったし自分の目の届く範囲のところで僕の作品を動かしたいっていうそういうのがあったんじゃないですか。

神内 文章と同じような感じで、あまり、作品について、これはどうだみたいな具体的なことはおっしゃらないタイプだったんですか。《とりこ》のことについては洲之内さんはかなり詳しく、書いてましたけど。それも作品のことをどんぴしゃになにか言うよりかは、ここに何かネクタイをひっかけたらみたいなエピソードから始まって、しかし作品が持っている宇宙的な奥行きの話なんかは少し触れておられたりするんですけども。よく画廊さんなんかで、若

手作家を指導するようなタイプだったらここはこうだからどうしろみたいな、こういうことはおっしゃるようなタイプではなかったんですか。

森 そういことは一切言わなかったねえ。

神内 作品をお見せするときは、アトリエにこられるような感じなんですか、それとももっていくようなかんじでしょうか。

森 うん、(現代画廊に)もってきていた。全部が全部じゃないけど、展覧会なんかやったでしょう。個展をそこでやったりしたから。

神内 そういのは緊張しましたか。

森 いや、全然緊張しなかった(笑)それはもう、冗談半分で。洲之内さんもちょっとやっぱり、茶化すところがあったから、こちらも負けないように(笑)

僕との付き合いで洲之内さんが抽象っていうものに対して目を開いていったというようなところがね(あった)。本当は具象が多かったわけだから、現代画廊は。

神内 洲之内さんと作家との関係っていうのも作家の人によってそれぞれ違うんだと思うんですけども。

見てもらうの緊張しなかったって言うのはちょっと意外ですね。

高木 洲之内さんが森先生の抽象的なところに一目置いていたっていうところはあるんでしょうね。

森 秋山画廊で展覧会をして。鎌倉の近代美術館の学芸員だった柳生さん(註：柳生不二雄)と言う人が。(註：1968年2月)そこで展覧会をしたときは、現代画廊じゃなくてそこで展覧会をしたのに、洲之内さんが身を乗り出して全部とりしきった。放っておいてくれなくて。

鳴原 それは森先生のは自分が扱いたっていう思いがあったんでしょうか。

森 いずれ自分がやりたかったんだろう。だから適当なやり方をされたら困るっていうんで身を乗り出した訳だけど。柳生さんっていうのは、鎌倉の近代美術館の学芸員でいたからねえ。だからちゃんとした人ではあるんだけど、洲之内さんとは全然やっぴりちがう。

神内 どの作品をだすとか、そういうとりしきり方だったんですか。洲之内さんが展示する作品を全部決めたんですか。

森 いやいや、それは…作品そんなに沢山出来なかったからね、その時。大事な作品だから人から人っていうのにはいかない訳で。こうしてほしいっていうのはいいですけどね。秋山画廊をやっていた柳生さんっていうのは柳生家の末裔だからね、学習院出てるわけよ柳生さんは。まあちょっと画商としてはやっぱりお殿様ですよ（笑）。だから洲之内さんとはまるで違った。

高木 柳生さんの他にも大河内さんとか、佐々木静一さんとか、先生はそのあたりの方とはおつきあいはあったんですか。

森 大河内さんはたまにやっぱり来てくれたけどねお殿様だよ。大河内さんは。

森 久万の美術館には鬚光の作品はある？なんだったかね。

神内 1点。鳥なんですけども、ちょっとだけ色がついている素描で。先生は鬚光好きなんですか。

森 うん、そうそう。

高木 洲之内徹とつきあいのあった愛媛の作家と言うと、三輪田俊助とか田中坦三とかそういう人が思い浮かぶんですけど、作家として付き合った作家たちはどなただったんでしょう。田中坦三は先生が紹介したのではないですか。

森 どうだったのかなあ。紹介したのかもしれないけど…坦三さんは洲之内さんが現代画廊を引き継いだ後、現代画廊で会ったんですよ。

高木 岡本鉄四郎なんかも会ってたんですか、松山に来たら。

森 うん、それは、親しかったねえ。やっぱり、同時代の松中（註：松山中学）の。同級生ではないよ。鉄四郎さんが後よ。だけど、松中の仲間だったからね。鉄四郎さんも亡くなった。いつ頃だったか。

高木 いまご健在なのは三輪田さんと、先生の二人。工藤省治さんと洲之内さんは？

森 うん、知ってはいたけど、それほど親しくはな

ったんじゃないかな。あまり焼き物には洲之内さん、手を出さなかったでしょう。

高木 三輪田さんと洲之内さんが知り合うのはどこなんですかね、その出発点は。先生と知り合った後でしょう。

森 やっぱり、岡本鉄四郎さんとの関係はあって、愛媛の外のあの年代の関係があった訳で。洲之内さんは自分が作品を扱おうという感じではなかった。仲間だったけどね。

神内 仲間だからかえって扱わなかった？

森 三輪田さんとかは文章には書いている。

神内 岡本鉄四郎とか三輪田俊助は地元の仲間という仲間意識が強くてかえって作品を扱っていないんじゃないかと言うお話でしたが、そうやって考えると、愛媛のゆかりの作家でありながら、そういう面とは切り離れた部分でとりあげられたという、森先生はまあ唯一の例と。関係性を仲間ともちょっと違うでしょうし、画商と作家と言う関係とも違うでしょうし、じっくりくる言葉があるとしたらどういう関係だったんでしょう。

森 うん、それもあるけど。それもあるけど、やっぱり人間的に理解できる部分と言うかね、それがやっぱり大きかったんじゃないかな。

高木 オーバーに言うと、同志なんですかね？

森 うん、同志的な部分もやっぱりあるかな。一つの時代を共有したということもあるからね。その、大人と子供の関係っていうのはずっと続くねえ。

神内 洲之内さんが松山の悪口をいったときにもっとやれというのは、森先生はどういう気持ちだったんですか。

森 僕はもう面白くてしょうがなかった。おんなじ気持ちよ。僕が言う訳にいかんから、僕の代りに言ってくれたみたい。手を叩いて喜んでましたよ。

神内 洲之内さんが愛媛の文化に対して果たした影響みたいなことは。

森 洲之内さんのコレクションは久万へ来たでしょう。あれがやっぱり影響を与えているんじゃないかね。それは洲之内さんの息がかかっているようなものだから。作り手側の人にとっては、好きな人ばかり

じゃなくて、いやな奴だと思ってたんじゃない。その方が多いと思う。光田さんとか村上の峰さんとか、洲之内さんの周辺の人たちは評価していたかもしれないけど。

洲之内さんはずっと松山にいたら、やっぱり合わなかったと思う。やっぱり東京出て行って、大きな世界にはいってそこで何が核となる部分かっていうのを見極めたんだから。松山にいたんじゃそれはできなかったんだから。僕が女学校の先生やめて東京へいく前に松山に出てきて、そこで洲之内さんに会ったんですよ。これから愛媛県離れて東京行くんだって。俺も松山離れてすぐに行くんだ、待っててよって言って。その時に約束して。東京出てきたらすぐやってきましたよ。大きな世界にはいっていったわけですからね。

神内 森先生ご自身もその大きな世界に行くのは不安な気持ちもあったんですか。

森 不安だらけよ。不安だらけだけど突っ走る、その勢いが強かったからね、そのころは。否定する部分っていうのをふりきって、勢いがあったからね。

象徴的な部分かもしれないね。清水の舞台が壊れた夢をみた、本当に。アカデミックな教育を受けたわけだからね、それを否定するわけだから、やっぱりすべてを壊さないと前へはいけないという、そんな気持ちでした。洲之内さんっていうのはしかし、ものすごい薄情なところもあったかもしれないけども、本当に優しい。

神内 薄情なところと優しいところ、覚えているエピソードはありますか。

森 切って捨てなきゃ、自分自身が前にすすめないから、そういう部分だと思いますよ、薄情っていうのは。自分自身を前にすすめるための一つの方法論だったと。生誕100年か。生きてたらね。亡くなって何年になるんですかね。

鳴原 昭和62年に74歳で。

森 74歳か。

高木 さっきの、薄情っていうのは洲之内が森先生に対して薄情っていうのはあったんですか。

森 それはない。

高木 薄情っていうのは学生時代に共産党活動もし、戦時中は中国で仕事もし、そういう中から、そういう薄情さを持たないと生きていけないという意味での、そういう経験も影響しているんですかね。森先生が（洲之内を）大人とを感じるひとつの要因なんでしょう。

森 いやあ、それは要因よ。切って捨てる部分が無いと、前へ進めないことがあるでしょう。それを切れないでいつまでもひっかかっているというのと、そこですっぱり切って前へ進む、その違いは。切って捨てる部分っていうのが薄情に見えるわけだよ。そういう部分が、やっぱり、あの人中国に行っていたでしょう。だからその頃の日本人よりは大きな世界を見てきていたんじゃないかと思うね。

神内 そうまでして前に突き進んだのはなぜだったかと思われませんか。

森 あの方が持っている本然の純粹さみたいなものじゃないでしょうかね。中々捨てきれない、日本人の。情緒的じゃなかったわけね、そういうところでは。ずばりとやれた。情緒的な、そういう優しさもあるわけよ。優しさもあるけど、本然そういう切って捨てる部分、やっぱりあれは中国にいたせいだと思うね。

神内 森先生は現代美術家集団が結成されたころは東京にいたと思うんですけど、戻ってこられて誘われたりとかはなかったんですか。

森 うん。それはなかったと思う。

高木 文藝の側面で洲之内さんと親しかった人に坂本忠士⁷さんと言う人がいるんですけど、坂本さんと森先生とはどういうお付き合いだったんですか。

森 気を許したわけじゃないけど、まあ、酒飲み友達。近所だったこともあったねえ、ただそんなに親しくはなかった。まあ洲之内さんなんかの仲間ではあったんだらうけど。

神内 洲之内さんは何か愛媛の同時代の美術についておっしゃるようなことはなかったんですか。

森 あんまりそういう話はなかった。だけど、愛媛の昔の人の、誰だっかなあ、まあ、そういう人のことは言っていましたけど。現在の愛媛の状態について

はあまり話さなかったですね。

鳴原 昔の人と言うのは？作家ですか？

森 うん、作家。

神内 戦前のことですか、それとももっとうんと古い、明治時代とかの…？

森 そういう話でもなかったなあ。柳瀬正夢とか、そこまでだね。それより古い人のことは言わなかった。（この後、1986（昭和61）年に東京有楽町マリオン・朝日ギャラリーで開催された田中坦三展（朝日新聞社主催）にて撮影された、森や洲之内、田中らが写った写真を見つつ、昔のことを懐かしく話されていた）

〔付記〕

愛媛県美術館と町立久万美術館は2014（平成26）年1月25日から3月16日まで、企画展「洲之内徹と現代画廊—昭和を生きた目と精神—」を開催した。本展覧会は、画廊「現代画廊」の経営者であり「気まぐれ美術館」の書き手でもあった松山市出身の文学者、美術評論家である洲之内徹（1913-1987）と美術との関わりを、洲之内が著作にとりあげた作家や現代画廊で展覧会を開催した作家、交流をもった作家の作品などを通じて紹介したものである。

本展覧会では「第5章 松山をめぐる」の中で、彫刻家・森堯茂（1922-）の作品を展示した。森堯茂は愛媛県出身、戦時中に東京美術学校彫刻科を卒業した。戦後、森は再び上京、素材の持つ材質感をいかした抽象彫刻を制作し、グループ展や個展で活躍した。1965（昭和40）年に松山に戻り、以後松山を拠点に活動を行っている。本展覧会では、洲之内の旧蔵品である《とりこ》（1958年、町立久万美術館蔵）の他、全2点の作品を展示した。森は戦後再び上京する直前に、当時松山市内に在住していた洲之内と知遇を得、以来親交を結んでいた。

展覧会の事前調査として、洲之内と直接深い交流を持った作家の一人である森に対して、筆者と町立久万美術館の高木貞重館長、神内有理学芸員とでインタビ

ューを行った。インタビューは2013（平成25）年4月16日午後、松山市内の喫茶店にて行い、洲之内徹との関係を中心に、当時の動向や心情について聞き取りをした。

本稿はインタビューの内容を抜粋して文字化したものである。書き起しは鳴原が行い、掲載にあたって私的な部分等については割愛した。

以下では、インタビューでは触れられなかった事項や資料について、若干の補足しておく。

森堯茂は、1922（大正11）年、愛媛県宇摩郡（現・四国中央市）に生まれた。当初画家を志したが、ロダンの作品や著作を機に彫刻への関心を高め、東京美術学校（現・東京芸術大学）彫刻科で朝倉文夫、建畠大夢らの下で学ぶ。在学中の1943（昭和18）年、第6回文部省美術展覧会（新文展）に《秋の作》が入選するが、同年に学徒兵として入隊し、翌年美術学校を繰り上げという形で卒業した。終戦後、愛媛県立三島高等女学校に教師として勤務をするが、1949（昭和24）年に教職を辞し、再び上京した。上京した当初森は、セメントやブロンズ、コンクリートを素材にした、抽象的で有機的なフォルムの作品を制作した。同時期、戦後の復興、都市復興とともに作家が彫刻作品を発表する場として美術館や画廊、あるいは野外彫刻展が次々と開館、創設されたこともこうした動きを後押ししている。森も、東京国立近代美術館（1952年開館）が開催した「前衛美術の15人展」（1957年）や、神奈川県立近代美術館（1951年開館）が1958（昭和33）年に開催した、日本において美術館が企画した初めての本格的な野外彫刻展である「集団58野外彫刻展」に作品を出品している。

1948（昭和23）年、森は再び上京する前に洲之内と初めて会ったという。森は当時26歳。洲之内は当時松山で古本屋を営みながら、小説の執筆を行っていた。森と洲之内が会う直前洲之内は『文學草紙』1948年6月号に発表した「鳶」が第1回横光利一賞候補となっている。なお、森のインタビュー中ではこの時「芥川賞候補となっていた」と述べているが、洲之内が最初に芥川賞候補となるのは、1950（昭和25）年のことである。しかし、当時から洲之内は、地元の新聞や同人雑

誌に作家という肩書で文章を発表しており、松山在住の新進の作家として知られていた存在だったようである。⁸⁾

この時の森とのやり取りからは、洲之内がこの時点ですでに上京の決意を抱いていたことがうかがえ、また実際に度々東京に出てきていたこともあったようであるが、洲之内が本格的に上京するのは1952(昭和27)年のことである。洲之内が現代画廊の経営に携わるようになってからは、展覧会の開催など次第に作家と画廊主としての関係性も構築されていく。

洲之内が森の作品について言及している最初の文章は、管見の限り、1957(昭和32)年に『愛媛新聞』に発表した日比谷公園彫刻野外展の展評である。彫刻野外展は、1951(昭和26)年から東京都と小野田セメントが協力して日比谷公園にて開催した野外彫刻展で、展覧会は会場を変えて1973年まで続けられた。森は1957(昭和32)年の同展にコンクリートを素材にした《聚存 No.1》(現・神奈川県立近代美術館蔵)を出品した。洲之内は次のように森の作品を評している。「『聚存』を見ながら、この籠の目のように自在に風の吹きとおる形体の中に、古い彫刻では思いもよらなかった内面的な空間の実現と、形象や個としての存在の狭さから解き放たれた人間存在の清々しさを感じて僕は眺めてあきなかった」⁹⁾

ちなみに、この記事で洲之内は「まだ会ったことがないが、これで初対面の挨拶をすませたような気持ちであった」と、森に会ったことがないと述べている。森への聞き取りによれば上京前に一度松山で会い、洲之内が上京した後もすぐに東京で会ったというが、森が言うところの洲之内が「話を面白くする」ための脚色によるものなのだろうか。なお、森は1997(平成9)年に寄稿した新聞記事のなかで、1952(昭和27)年秋、洲之内が森のアトリエを訪ねたことを回想している。¹⁰⁾

現代画廊で森堯茂の展覧会が開かれたのは1961(昭和36)年7月19日～27日。森の個展は田村泰次郎が経営していた時代の現代画廊で最後の展覧会となった。

『芸術新潮』1961年9月号には、現代画廊が廃業の危機にあるという記事と共に、「閉鎖を伝えられる現代画廊 最後の個展」として、田村泰次郎と森とが写っ

た画廊の様子の写真が掲載されている。同年『東京新聞』9月12日夕刊に田村の「画廊廃業の弁」が掲載され、その後洲之内が画廊の経営を引き継いだ。洲之内が《とりこ》を入手したのは、1958年に神奈川県立近代美術館で開かれた「集団58野外展」に同作が出品された後の1961年である。¹¹⁾ このような経緯から、現代画廊での個展開催も洲之内の関与によるところが大きいとみてよいだろう。

1963(昭和38)年、愛媛新聞社の主催で森堯茂個展が松山市で開かれた。この展覧会に合わせて、『愛媛新聞』紙上では「現代美術の意義・見方」という座談会が開かれ、洲之内や森が出席し、以下のようなやり取りを交わしている。

洲之内 ところで、最近では工業技術の発達にもなつて、美術、建築などの材質が変わってきたが、人間がコンクリートに造形的な欲望を感じるといったことは、産業革命以前には考えられないことだ。鉄の魅力はわれわれの生活と直結している。森さんの作品にも、これまでのねん土彫刻や木をきざんだものにはない造形感覚がみられる。

森 私としては、金属の材質の持つ機能を最高度に発揮できる造形に努力しているつもりだ。これまでの石こう彫刻などはものの形をあらわすことが主で、材質の点はほとんど顧みられていない。¹²⁾

ここで、森の鉄の作品には従来の素材にない造形感覚が見られる、という洲之内に対して森は、金属という材質を表現に発揮するように努めている、と返答している。その後、1968(昭和43)年に現代画廊の主催により松山で開催された森堯茂彫刻展のパンフレットに寄せた文章「逆説的な叙情」の中で洲之内は、「造形の動機は、そういう自然とは対蹠的なところから来ている。そもそも自然には直線というものはない。そして、いわば反自然的なその造型思考には、粘土やブロンズよりもコンクリートや鉄がふさわしい。数年来、森さんが鉄に執念を燃やしてとりくんでいるのは、たぶんそのためだろう(略)非常に鉄やコンクリートを駆使した作品が、いつも繊細でリリックな、人間的な

情感をたたえている。」⁹³と森の作品を評している。森は1958（昭和23）年頃から鉄を素材に制作を行うようになるが、洲之内の、森の造型表現にとって粘土やブロンズよりも、鉄やコンクリートの素材がそぐうという森の作品理解に対する背景には、1963年の個展やその時の森とのやり取りの影響が強くあったことがうかがえる。

森は松山での個展の後、1年間ほどメキシコやアメリカ、ヨーロッパに渡り、帰国後の1965（昭和40）年、松山に移住した。以来森は、松山における現代彫刻の旗手として、松山を拠点に制作を行うこととなる。インタビューでも触れられているとおり、1968（昭和43）年9月21日から27日まで、森堯茂彫刻展が、現代画廊の主催によって松山市民会館で開催された。この個展では、1967年に制作し、秋山画廊での個展にも出品された《砂の中の方形》シリーズや、《羽根のある旅行者》など計15点が出品された。



（「森堯茂彫刻展」パンフレット、掲載されている作品は左より、《砂と水と》1968年、《砂漠の植物》1968年）

翌年、坪内晃幸らと愛媛野外美術展を開催したほか、とりわけ1960年代終わりから70年代にかけては、愛媛現代美術の現況展（1970年、愛媛県立美術館）、第1回愛媛造形作家協会（1971年、愛媛県立美術館）などの現代作家のグループ展への旺盛な参加が見られ、また、愛媛県内の野外彫刻やモニュメントの制作も手掛けている。このように松山において同地の美術団体や展覧会に関与していくようになる森に対して、「あまり関わらない方が良くないか」というような様子であった」と森は述懐している。ともあれ、森と洲之内との関係は洲之内が亡くなるまで続いた。9歳年上の洲之内との関係を「大人と子供の関係だった」と繰り返し述懐した森であったが、洲之内もまた、森によって現代彫刻に目が開かれたと度々語っている。その

関係は、インタビュー中にも触れられているとおり、作家と画商との関係であるとともに、故郷を同じにする友人でもあり、相互の表現活動に影響を与え合う関係であったのだろう。

洲之内と森との関係からは、作家と画商がいかに影響を与え合いながら制作活動、画商活動を行っていたかということがうかがえる。また、森を通して語られる洲之内の松山の美術に対する姿勢からは、洲之内が故郷を語る時の背景をみることができるだろう。

脚注

- (1) 『文脈』は1952年創刊の文芸同人雑誌。文脈社発行。戦前に洲之内徹、光田稔らが発行していた『記録』の同人が中心となり創刊された。
- (2) 長野広生（1920-？）松山市出身。シナリオライター。愛媛新聞社在籍後上京し、長尾広生の名前でテレビドラマ脚本等を手がけた。
- (3) 村上峰保 松山市出身。愛媛新聞社に勤めるかたわら、『文脈』などの同人として文芸活動を行う。洲之内とは幼稚園の同級生で、戦前から親交を結んだ。
- (4) 光田稔（1908-1998）松山市出身。南海タイムス、愛媛新聞社を経て、南海放送常務取締役などを務める。『記録』『文脈』同人。戯曲に「杉江一家の人々」等がある。
- (5) 名本栄一（1909-？）松山市出身。伊予新報、毎日新聞記者をつとめる。戦前は小林潤三の名でプロレタリア文学活動にも加わり、同人誌『記録』にも詩や随想を寄せている。
- (6) 1969年4月、森や坪内晃幸らの企画によって、堀之内公園で開催された「第1回愛媛野外美術展」。森はこの展覧会に《Lの空間》を出品した。
- (7) 坂本忠士（1918-1993）松山市出身。シナリオライター。NHK松山放送局にてラジオドラマの脚本を手掛ける。1974年、「松山文化団体連絡協議会」を作り、『季刊えひめ』を発行した。晩年は大街道で田都画廊を経営した。
- (8) 1946年頃から再上京する1952年までの『愛媛新聞』への寄稿を中心とする松山における洲之内の活動については、拙稿「洲之内徹の松山時代1946-1952」（『洲之内徹と現代画廊』展覧会図録、2013年）および同展図録の文献目録を参照。
- (9) 洲之内徹「風の透き通る彫刻」『愛媛新聞』1957年5月23日
- (10) 森堯茂「私と洲之内徹 「気まぐれ美術館」展によせて(4)」『朝日新聞』愛媛版、1997年8月28日
- (11) 洲之内徹「気まぐれ美術館⑧」『愛媛新聞』1963年3月16日。なお、このエッセイでは美術館からこの作品を「かついで」持ち帰ったエピソードが語られている。
- (12) 座談会「現代美術の意義・見方」『愛媛新聞』1963年3月30日。出席者は洲之内、森のほか、中村伝三郎、小泉政孝、岡本鉄四郎、松本須賀子、高本鉄之介、工藤省治、林俊昭。

- (13) 洲之内徹「逆説的な叙情」『森堯茂彫刻展』（1968年9月21日
-27日、現代画廊主催、松山市民会館第一会議室）パンフレッ
ト

〔謝辞〕

本稿を成すにあたっては、森堯茂氏をはじめ、多くの方のご協
力、ご助言を得た。ここに記して感謝申し上げます。